



↑認知症だと本人は気づき、メモを書き忘れないように葛藤している形跡をこのメモから感じることができます。

「家族に内緒で、忘れないようにとメモを書いていました。車が大好きだったので、信号の色を忘れないよう

「まず認知症という病気を知ってほしいです。隠さず病気と受け止めてください。また地域が認知症について関心を持ち、おかしいと思ったら声をかけるなど見守りが必要だと思います」

「仕事を普通に行っていたので、まさか主人が認知症だったとは、夢にも思いませんでした」と話すのは、平成15年に認知症と診断され、現在寝たきり

となった小見山秀雄さん(70)を10年以上介護している妻の純子さん。日本では高齢化が進み、認知症患者数が増加し、近い将来には高齢者の5人に1人が認知症になると予想されています。自分だけではなく、愛する家族が認知症を患う可能性を秘めている

のです。小見山さんも他人事だと思っていた認知症。おかしいと思った出来事などはあったのでしょうか。「同じものを毎日買ったり、実姉の名前が分からなくなったり。おかしいと思っても、気にしていませんでした。今思えば、初期症状だったんですよ。すぐに病院に連れていけばよかったと後悔しています。」

「頼る人が頼れなくなる。少しずつできなくなる寂しさ。受け入れられず、ずっと一人で抱え込み、悩んでいます。今は、少しずつ現実を受け入れ、介護サービスなどを利用することで落ち着いてきました」と話す小見山さんに認知症について皆さんに伝えたい想いを伺いました。

### 「まさか」他人事だと思っていた認知症

頼っていた大黒柱の夫が、認知症になり突然頼ることができなくなる。10年以上認知症を患うご主人を介護しながら過ごしている小見山さんにお話を伺いました。

# 「隠れじぶん、病気に受け止める」

”



↑昭和46年に結婚した小見山さん夫婦。秀雄さん27歳、純子さん23歳。ご主人はフォトグラファーとして活躍していました。

## 特集 認知症をゆっくりと考えてみませんか

# 認知症、じぶん事。

この写真は、表紙の小見山秀雄さんが認知症になり、自分の記憶が無くならないようにと懸命に書いたメモ。信号の色の意味が分らなくなる。まだ秀雄さんが60歳になる前に書かれたものです。

高齢化が進む日本。

近い将来、高齢者の5人に1人は認知症になると予想されています。

認知症は高齢者だけではなく、若年性の認知症もあり決して他人事ではありません。

脳の病気である認知症。

病気として捉えず、放置した結果、病気が進行してしまうケースが後を絶ちません。

「おや?」と思った時に自分自身が、そして周囲が気づくことはとても重要なことです。

今回の特集は認知症。

この病気を他人事ではなく、じぶんの事として、少し考えてみませんか。